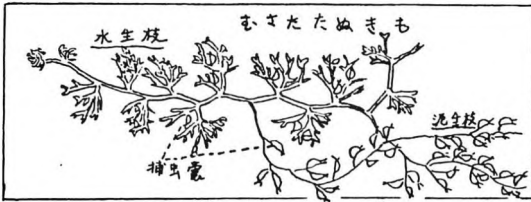


ムサタタヌキモに就いて

佐藤安司

前号にて既報のムサタタヌキモ (*Utr. yosezatoi* Makino) に就いてその後、志方欽二先生から記載図のコピーを頂いたのでここに御紹介したい。本種は昭和10年当時成東中学校教師であった与世里盛春氏が成東に於いて採集されたもので、牧野博士により新称“ムサタタヌキモ”を与えられ「千葉県博物研究」誌上に発表されたものである。発見者と与世氏は当時日下部勇氏の主宰された「愛花支会食虫植物研究会」のメンバーでもあり、その原図は全年8月発行の機関誌“Sun-Dew”第1巻5号に「千葉県下に発見せられた食虫植物」と題して転載された。ここにお目にかかる図は全“Sun-Dew”誌より志方氏が筆写されたものである。その種名「ムサタ」は本種の採集地名に由来するものと思われ、図から推測するに形態はヒメタヌキモに近似と思われるが泥生枝を生ずる点に於いて異なっている。現在ではその自生を見ることはできないが、参考迄に記録にとどめておきたいと考えた次第である。(1982.6.25)



“Sun-Dew” Vol. 1, No.5, p 1 「千葉県下に発見せられた食虫植物」中、ムサタタヌキモの図

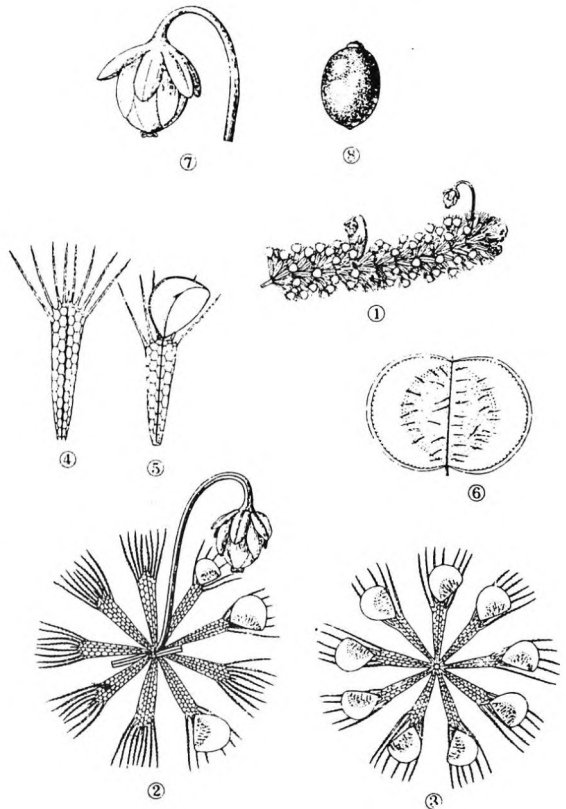
満洲水草図譜と食虫植物

佐藤安司

先日古書店にて久しく探していた「満洲水草図譜」を手にする機会を得た。昭和17年三省堂の発行、著者は佐藤潤平氏でその図は美しく描かれており大変興味深いものがある。全著中食虫植物は3種挙げられている。タヌキモ、コタヌキモ、ムジナモがそれで、同方面のタヌキモはよく結実すると書かれている。その種子の稜縁には歯牙を有しないが凹凸があり、この点に於いて欧州種 (*Utr. vulgaris*) と異なるものの一応欧州種と同一と見做している。邦産タヌキモは結実しない処から牧野博

士により *Utr. japonica* の名を与えられ独立種とされたが、現在では邦産種も欧州種と同一であるとする考えが一般的である。

さて全著中興味のあるのはムジナモの図である。寒冷地に生育するものだけにその成株はいささか貧相なもので、邦産種に記録されているような30節をこす長大な個体は望むべくもないが、開花はするようである。ムジナモは花梗下の輪生葉には捕虫器をつけない特長があり、その点本書の図は正しく、その性質をとらえているが、プランツェンライヒのモウセンゴケ科のモノグラフにディールスの描いた図は花梗下の輪生葉にも捕虫器を有しているように描かれており間違っている。同じ図はプランツェンファミリエンの新版にも転載されたが、ドルーデの著す旧版の方の図も拙いものながらよく見るとやはり同様の間違いをおかしているので、欧州種はよほど開花例が少ないものなのであろう。事実日照の関係で花茎は上がるものの満足に花卉が開かないらしく、ディールスの図のうち花器に就いては牧野博士の写生図がそのまま引用されている。



「満洲水草図譜」より

最後に余談になるが最近完結した Flora Europaea の第一巻中タヌキモ属の項は大家テイラーが担当執筆しているが、同氏は欧州産ヤチコタヌキモ(*Utr. ochroleuca*)の部分で同種をコタヌキモとヒメタヌキモの交雑種ではないかとする大変面白い見解を発表しており大いに興味をひかれたことを付記しておきたい。(1982.7.8)

◎ 図書紹介

G. ブリュンナー, P. ベック著/熊谷孝良訳(1981) 美しい水草の育て方 テトラ熱帯魚飼育シリーズ(2)、126頁、発行所; ワーナー・ランバート㈱ペット製品事業部(〒108 東京都港区白金台3-19-1. 第31興和ビル)

水中におかれた植物は空気中におかれた植物とは光学的に別世界のものであるだけに、いい知れない美しさをたのませてくれる。水草同好の士は何らかのかたちで水草を育てた経験があったり、これから育ててみようとする機会を伺っている。このような人のために、心ならずも良書が入手できるようになったのはうれしい。この本は熱帯魚飼育の趣味者のために西ドイツから出版されたもので、副題には「水槽にふさわしく、扱いやすい水草の育て方」とある。

熱帯域の水草の自生地の写真と説明は量的に限られてはいるものの、一度でも熱帯のどこかの淡水域に足をかけた者にとってはなつかしく思え、その内容は実に正確である。主として亜熱帯から熱帯の水域に分布している約80種類の水草のカラー写真、自生地および植物についての簡単な記載と要をえた育て方が書かれている。カラー写真は鮮明で、かなりの細部形態も読みとれる。図鑑や専門書からは得られない一味違った生態学的な情報も数多くもられている。訳本とは思えない程に読みやすく書かれたのは何よりである。片仮名書きの学名のいくつかについては、訳者が意識的にラテン語の発音に忠実にそったものとしたために、平素われわれが耳にしている発音とは異なる。国際学会で使われている学名は、使用者それぞれが関係する国語に由来した発音でなされるものが多いが、共通した発音でなされるものも多い。やはり聞きなれた発音がよからう。

西ドイツは陸水生物学のレベルの高い国であり、特にアマゾン水系に関した研究業績は世界的に定評があるだけに、本書の内容は水生植物培養の立派な入門書である。趣味的知識と学問的知識の隔たりが少しでも小さくなる

ことは実にすばらしいことであることも、この一冊の本から強く感じたのである。(1982.5.31記)

千葉大・理・生嶋 功

※ この本は、一般書店では扱っておらず、熱帯魚店で入手できる。直接発行元へ注文される場合は、価格2,800円に送料300円をそえて、現金書留で申し込まれたいとのこと。(角野)

○ H. Mühlberg "Das grosse Buch der Wasserpflanzen" (Verlag Werner Dausen, Hanau, 1980, 408 p)

アクアリウムや池で水草を栽培する人のための本だが、栽培に成功するためには水草の生態や生理をよく知らねばならないということで、水草の特性について詳しい解説をしている。第1部「水草の生物学」は90ページに及び、手頃な水草学入門となっている。第2部では、分類群ごとに形態や分布・生態にふれ、栽培の手引きをしている。ドイツには類書が少なくないが、この本は内容的にもよく充実していると思う。(角野)

○ O. P. Gupta "Aquatic Weeds: their menace and control" (Today & Tomorrow's Printers & Publishers, New Delhi, 1979, 272 p)

水生雑草のひきおこす諸問題、その防除のために試みられるさまざまな方法の紹介と評価、そして、水生雑草の利用にもふれている。水生雑草が重大な問題になっている当事国で出た本だけに、内容も具体的である。引用される例はインドのものが中心だが、水生雑草学の課題を要領よくまとめた基本的教科書といえよう。39ページにわたる文献リストも大変参考になる。

(角野)

○ B. Gopal & K. P. Sharma "Water-hyacinth (*Eichhornia crassipes*): the most troublesome weed of the world" (Hindasia, New Delhi, 1981. 128 + 91 p)

世界各地で問題になっているホテイアオイのモノグラフである。分類、形態、生態等についての従来の知見を整理した上で、そのコントロール及び利用に向けてのさまざまな試みが紹介されている。そして、人間とホテイアオイの共存を目指して、今後の研究を進めていく必要性が指摘されている。末尾にある1457篇の文献は、ホテイアオイに向けられた関心の大きさを改めて知らせてくれる。(角野)